

海外研修・国際交流奨励生報告書作成要領

令和 6 年度「前期」海外研修・国際交流奨励生報告書

研究テーマ「多民族国家の文化共生と経済発展」

学部学科 商学部マーケティング学科

学年 2 年

氏名 薄井暖奈

【渡航目的・研究テーマについて】

シンガポールへの渡航目的および研究テーマとして、多民族が生活するうえで必要な価値観や制度および、それぞれの文化の保存や発展について、自国の経済発展をするうえで必要な要素についてヒアリング調査などの実地調査を経て、実態を調査する事である。近年日本は、少子高齢化が急速に加速している。少子高齢化によって引き起こされる問題が2つ挙げられる。

1つ目は、慢性的な人員不足である。若者の人口が減少することで働き手の減少が発生することが要因だ。日本では、コンピュータの技術の発展により機械による自動化が進められている。しかし、機械化や自動化には、莫大な資金と時間を要するため、すぐに人手不足を改善することは困難である。そのため、海外からの労働力の確保を実施していく必要がある。

2つ目の問題として、日本マーケットの縮小である。少子高齢化による人口減少が起こるため、国内市場の母体数の減少による収益の減少や国内総生産の低下も顕著になってくると予想される。そのため、日本国内のみならず、世界に目を向け、世界でマーケットを広げていかなければならない。したがって、日本の民族観や宗教観、さらには、学校教育をも見直さなければならない。

渡航先をシンガポールに設定した理由として、シンガポールは東京 23 区ほどの国土で、人口も日本の 22 分の 1 ほどにも関わらず、近年急激に経済成長を遂げている。経済発展の要因として挙げられることは、積極的な海外企業の誘致である。ここで問題として挙げられることは、人種や宗教、文化などの様々なアイデンティティーを持った人が集まることにより、価値観の違いから民族間の衝突が起こることである。しかし、シンガポールは、多民族国家であるが、民族間の争いなく秩序を保たれている点から、シンガポールに渡航をすることで、日本が今後直面しうる問題の解決の糸口を見出すことができるのではないかと考え、渡航先に設定した。

私は、この渡航を通じて、多民族国家になりゆく日本をより住みやすい環境にしていく手助けできるようにしたい。そのためにこの渡航を通じて、多国籍国家で生活するうえで必要なマインドや多民族とのかかわり方を学び、日本にその概念を広めていきたい。すべての民族と平和に暮らすことができる社会の実現をサポートできるようになりたいと考えている。

【渡航計画について】

8/13	入国 ホテル(オーチャード)
8/14～17	・ヒアリング調査 リトルインディア・チャイナタウン周辺/アラブストリート・カントン周辺 ・文化・生活環境観察 Singapore Chinese Cultural Center
8/18・19	決済方法の調査 オーチャードストリート
8/20	決済方法とデジタル普及率に関する調査 CBD(Mastercard や P&G)・ウエストエリア(日系企業)周辺
8/21	帰国

〈実行〉

8/13	入国 ホテル(オーチャード)
8/14	文化調査 NMS(シンガポール国立博物館)/チャイナタウン
8/15	・【Canon】企業訪問・インタビュー取材 ・文化・SNS 調査 LUCKY PLAZA(オーチャード)/ シンガポール高島屋(シンガポール)
8/16	経済発展・決済方法調査 CDB(Central Business District)/リトルインディア/ムスタファセンター
8/17	決済方法調査 アラブストリート/マリーナベイサンズ
8/18	文化・SNS 調査 NUS(シンガポール国立大学)
8/19	インタビュー取材 午前：ヒグラシ マユミ (Raffles Japanese Clinic) 午後：シオガイ シオミ (OK Smart Market Pte.Ltd.)
8/20	文化調査 カトン地区
8/21	帰国
9/10	【みずほリサーチ&テクノロジーズ】オンライン取材

【調査・交流方法について】

私たちは、大きく分けて3つの方法で調査を行った。1つ目は、シンガポール現地で生活する現地住民に対して google フォームを用い アンケート調査を実施した。主な調査場所としては、シンガポール国立大学や CBD などの様々なアイデンティティを持つ人々がともに生活する環境のほかにリトルインディア、チャイナタウン、アラブストリートなどの各民族文化が色濃く残る場所にいて特定の民族の人を対象に調査を行った。2つ目は、現地に長年住む日本人にインタビュー調査を行った。今回は、シンガポールに20年以上住みシンガポールの永住権を持っている日本人2名に対してインタビューを実施した。3つ目は、シンガポールに支社をもつキャノン株式会社様、伊藤忠商事株式会社様、みずほリサーチ&テクノロジーズアジア株式会社様にご協力いただき企業訪問やインタビュー調査を行った。これら3つの質的調査、量的調査から整合性を確認しつつ情報を収集し考察していった。

これら3つの調査を行う上で異国の地ならではの課題に直面した。1つ目の現地の人へのアンケート調査では、当初、私たちが実施予定であった調査方法に Google フォームを見せて口頭で回答してもらい、調査対象者に許可を得た後録音をして、後日自分たちで Google フォームを打ち直すものであった。しかし、この方法での聞き込み調査をする上で言語と効率面での問題が浮かびか上がってきた。私たちは、シンガポールの共通語が英語であるためアンケートに英語のみ表記していたが、シンガポールは独立してからの歴史が浅く英語教育が整い始めたが約55年前だったことから年配の人には英語が伝わらないことが判明し、中国語表記を取り入れて対応した。年配の人や中国人の労働者、留学生など多くの人にアンケートに協力していただけるようになった。効率面では、当初調査場所としてホーカーセンターで飲食をしている人にアンケートをとろうと想定していたが、ホーカーセンターが自分たちの想定以上に混雑していたことや観光客の多いことからホーカーセンターでの調査日数を減らし大学などの地元の人のコミュニティにアプローチする方針にシフトチェンジした。また、アンケートの回答者数を増やすために Google フォームの QR コードを読み込んでもらい調査対象者自身で Google フォームに答えてもらう方針に変更し効率の向上を図った。2つ目、3つ目の調査では、現地に住む日本人や日系企業へのアポイントメントをとるのに苦戦した。シンガポールに以前知人が住んでいたのもあって現地に住む日本人10名ほどに連絡を取ることができたが、インタビュー調査は時間がかかるため2名しかアポイントメントをとることができなかった。また、日系企業には20社ほど企業訪問の依頼のメールを送ったが実際に調査に協力いただけたのは3社のみだった。

現地の状況はその地に降り立ってみないとわからないことが多く想定通りにはいかないことも多かったが当初の調査方針の Google フォームを活用したアンケート調査を基軸とし、現地の情報を考慮しつつ調査方法を変化させていく臨機応変さが発揮できたと感じている。Google フォームの作成やシンガポールの経済発展や文化、歴史などの下調べなどの事前準備をしっかりと行っていたため、現地の状況に合わせて調査方法を早急に変えることができた点が良かった。今回の調査は、聞き込み調査に加えて企業訪問や現地に住む日本人の人にインタビューをする質的調査も併せて行ったため、よりよい調査結果を導くことができたため、質的調査と量的調査双方からアプローチする調査方法が適したものだったと考えている。

【調査・交流結果について】

① 多民族社会で生活する上で必要な価値観について

私は、多民族社会で暮らす上で必要な価値観が3つあると考えている。1つ目は、民族が違う者同士でも互いにリスペクトしあうことである。現地住民を対象に実施したアンケート調査の結果から100%全員が多民族国家であると答えていることから、シンガポールに住むほぼすべての人がシンガポールを多民族国家だと認識している。（＊①）また、宗教、文化、生活スタイルが大きく異なる環境でともに生活していく上でそれぞれの違いを理解し、互いに不快感を抱くことのない距離感を弁え、人間関係を構築していくことが円満に多民族社会で生活するうえで重要だということが分かった。2つ目は、契約やルールを徹底して守るようにすることである。シンガポールは、公共の場所への規則が厳しく設けられており罰則も厳しい。多種多様な人々が生活するうえで、人々が自国のルールに従ってはいまどまりがなくなる。さらには人材の流動が激しいこともあって、就労ビザが切れてしまうと2週間で出ていかなければならないという規則や会社の雇用する人数や民族比率を政府が発行する就労ビザによって調整しており人材雇用の面でも厳しく管理されていることが分かった。多民族、様々な宗教、文化を持つ人々が秩序のある社会を保つためにも統一した規則を作り、守ることが必要なことであると考えられる。さらには、住民に利用するうえでの注意喚起にもなっており、観光にも力を入れているシンガポールにとって現地住民の利用方法が改善されていくことは一隻二兆なのではないだろうか。3つ目は、人口の約7割を占める中国人がシンガポールの文化、言語などにおいてあまり影響がないこと。私たちはソーシャルネットサービスについてのアンケート調査を行った際、中国でよく使われている「We-Chat」の使用率が中華系の人口が多いシンガポールなら必然的に多くなるのではないかという仮説を立て、調査を行った。結果としては50人にアンケートを実施し、「what's up」66%、「Instagram」60%、「Facebook」58%、「We-Chat」22%という使用率を得ることができた。（＊②）この結果からわかることは、中国系の人口が多いにも関わらず中国でよく使用されているソーシャルネットサービスを使用する割合が多くなるのではなく、場所や関わる人に合わせてSNSを使用していると考えられる。また、現地の日本人の方に伺ったお話によると様々な国の人とネットを介して話すときは、世界的に使用されている「what's up」を、日本利用し、各民族のコミュニティ内に連絡を取るときは各国のSNSツールというように使い分けしているとおっしゃっていた。また、シンガポールの文化は人口が少ないインド系の文化もすたれることなく残っていることからその様子をうかがえる。

したがって、多民族社会で生活するうえで人口比率から文化を押し付けることなくその国独自の文化を形成しているということが分かった。

② 文化の保存発展について

シンガポール国立博物館で学んだシンガポールの歴史的観点から多民族国家であるシンガポールにおいて各民族がどのように自分たちの文化を維持発展させていっているのかについて考察を行った。

シンガポールは、14世紀ごろサン・ニラ・ウタマ王子が狩りに行った際に見たことのない未知の生物ライオンを見たことでその街をサンスクリット語で「ライオンの街」を意味する「シンガプーラ」と名付けたことが由来になっている。シンガポールは立地面で優れていることに加え、航海

技術や造船に優れておりさらには、広範囲で貨幣が出土していることか他国とのスパイスの貿易の中継地点となることで繁栄を遂げたことが明らかになった。イギリスの三角貿易の時代になるとイギリスは貿易の中継地点を求めマラッカ海峡の先端に位置するシンガポールに目を付けた。東インド会社はトーマス・ラッフルズという人物がシンガポールを自治区として統括するために派遣した。ラッフルズは、ヨーロッパに倣った建物、制度などを多く持ちこみヨーロッパ風の近代化に尽力していった。しかし、都市部では民族文化の違いから争いが絶えず、ラッフルズはこれを収めるために中華系、インド系、アラブ系、ヨーロッパ系の大きく分けて4つの民族ごとに居住する区間を分ける政策を打ち出し実行した。また、その頃の教育は中国人の学校では中国への愛国心をはぐくむために中国語や中国の伝統文化を学習していたという。日清戦争や日露戦争など戦争が乱発する時代が訪れると自国防衛のためにも軍勢力を高めていく必要が出てきた。ここで課題になってくることは今までの民族ごとに生活していた環境から言語も文化、民族も異なる人々が互いに意思疎通をとれるようにしていかなければならないことである言語の面では、英語を共通言語として英語教育が推進されていき、文化面では、共同生活を送るうえで民族理解の精神が生まれていったのではないかと推測できる。この軍隊という様々なアイデンティティーを持つ人同士が意思疎通をはかり、ともに生活するという今までにはない出来事が多民族国家に属するための精神の礎になったのではないかと歴史的観点から推測できる。しかし、なぜ軍隊のような文化や言語を統制する動きをとるのにも関わらず現在のシンガポールのような多種多様の文化がすたれずに残っているのだろうか。今現在では、HDBなどの民族構成割合の決まった団地で多民族が入り混じる環境下でほとんどの人は生活している。学校でも民族構成割合が決められ、様々な民族と偏りなくコミュニケーションが取れるように設定されている。現地住民へのアンケート調査では食事や話題、宗教など多民族国家で気を付けていることが多数挙げられ民族を互いに理解しあう心構えを常に持ち続けていることがわかる。そのため、民族的催事や食文化、チャイナタウンやリトルインディア、アラブストリートなどの自分自身とルーツの近いものに触れることに喜びを感じ、大切にする姿勢が生まれる環境下で生活しているのではないかと考えた。さらには、外国人労働者の存在も大きな影響を与えているのではないだろうか。中国やインド本土から働きに来る人々が一定いることでシンガポール現地民として生活する人々と交流することで言語、文化の面での刺激を受け文化の発展へとつながっていつていると考えられる。

シンガポールの学校は先にも述べた通り、民族構成が定められており社会と同じような多民族との共生を意識しており、シンガポールへの愛国心をはぐくむための教育が小さいころから施されている。建国記念日に政府がシンガポールの小さい国旗が一家に1枚配布して愛国精神を高める一方で、シンガポールでは、母語教育も行っている。これらの教育方針から、シンガポール国民としての帰属意識を高めるとともに自分自身のルーツを大切にしていける精神を学ぶことができ、将来のシンガポールの文化に奥行きを持たせ発展していくことが可能とするものになっているのではないだろうか。

したがって、歴史的観点やシンガポールの住環境から人々はシンガポールへの帰属意識、多民族国家で生活していることを第一に置きつつ、自身のルーツを忘れずその文化、言語を大切にしていけることで自国文化の継承、保護を行い、多民族での触れ合いによって独自の文化を発展させているのではないかと考察することができた。

③ 自国の経済発展をする上で必要な要素について

シンガポールがマレー連邦から追い出されてシンガポール独自の経済発展を遂げていく中で初代首相のリー・クアンユが打ち出した国の基盤となる政治方針が今日の経済発展に大きく起因している。シンガポールは第二次世界大戦時に日本の自治区として日本人として生きることを強要されるなど迫害を受けていた。そのため反日精神を持つ人が多くいたが、リー・クアンユが「許そう、決して忘れまい」という呼びかけを繰り返し行い、工業化をするために日本の優れた技術に倣って人材育成に取り組み国の居住環境を整え反日精神、感情重視ではなくイデオロギー重視の国風に落とし込んでいくことに成功した。

*③からシンガポールの国土の狭さ、政府の権威、環境の同一性、チャレンジ精神旺盛な国民性などを要因に経済発展のための法律を整えることが容易であったことがシンガポールの目まぐるしい成功を導いたと考えられる。もし、日本がシンガポールのように法整備の面から大きく経済発展していくことは都市部だけではなく山や川などの多種多様な地形からなる生活環境や国民性の違いの面から難しいと考えられ、日本の激しい市場競争の中に進出していくことはリスクが高い。立地、法的整備、国風、リスク面でも日本がシンガポールを模した経済発展政策を行っていくことは難しいと考えられる。

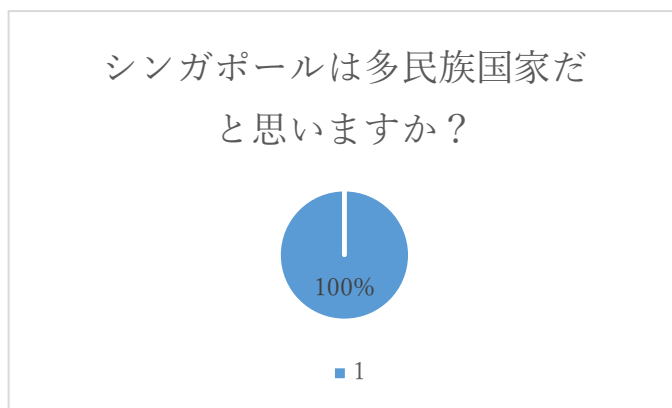
シンガポールの日系企業への訪問の際に、シンガポールで働く上で気をつけていることはなんですかという質問を通じて日本企業の方針に合わせてもらっている部分が多いとおっしゃっており、シンガポールの日系企業で働くことを希望する人たちの多くは日系企業を渡り歩いているなど企業方針に近い考え方を持つ人が多いと伺った。先にも述べた通りリー・クアンユが日本の優れた技術をシンガポールの技術力革新に取り入れていったこともあったことから、日本は他国から豊かな自然環境、おもてなしの精神や優秀な人材、独自の文化、品質、マナー、治安など数多くの要因で高い評価を受けていると考えられる。

今後日本は国の方針として、少子高齢化による人材不足、マーケット規模の縮小の問題によって外国企業を積極的に誘致してそれに合わせて多民族国家としていくことや食文化や日本の豊かな自然環境、独自の文化を武器に観光大国として国を発展させていく方針もとることができる。しかし、日本が今後歩んでいく道次第で日本の唯一無二の部分が他国と類似した国になっていってしまうことが懸念点としてあげられる。私の意見としては、日本特有の自然や文化を生かした観光業にも重きをおきつつ、日本が他国より秀でている部分である品質、おもてなしの精神などを培うノウハウを外国人労働者に伝えていけるようにマニュアル化を進めていくべきなのだと考える。海外の雇用形態では自分が与えられた役割しか経験できないけれど日本の雇用形態の利点として、1つの企業の様々な仕事を経験することが可能な点であると考えている。日本の雇用形態は、社員同士のチームワークを高めることができ、従業員としての帰属意識が生まれ仕事に対する責任感や思いやりを持って仕事を行うことができると考えられる。ジョブ型の雇用形態が一概にもいいとは言えないし、外国企業を積極的に誘致する必要もないと考える。その代わりに、日本国民が日本を誇りに思うことができるような環境づくりをしていくことで日本に魅力を感じた外国人労働者が次第に集まっていくのではないだろうかと考えた。そうすれば人材不足を解消することができその上で、日本の文化やおもてなしの精神などの強みは保持しつつ経済発展していくことができるのではないだろうか。

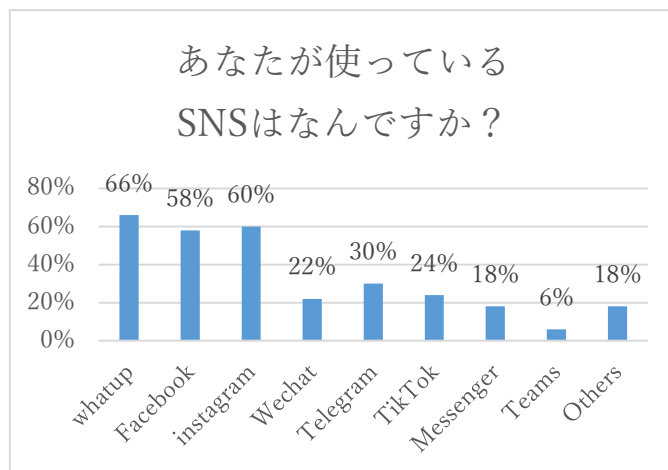
【今後について】

この調査をきっかけに日本の進んでいくべき道、自分たちが将来どのように日本と向き合っていけばいいのかが少しでも分かったような気がする。私は、今後公務員になって日本の魅力を世界に伝える、国民が日本を誇りに思えるような街にしていくなために文化の継承や自然環境の保護を中心に日本の魅力を保護、発信していく業務に携わっていきたい。さらには、新型コロナウイルスの規制が緩和したことから海外で留学では味わうことのできない自分自身の興味のある調査、活動を企画して実行する貴重な体験を学校の支援を受けながらできるという国際交流奨励生という魅力的な制度を自分たちの経験をもとに様々な人に知ってもらえるように宣伝活動をしていきたい。

*①現地住民に対してシンガポールは多民族国家であることを質問した結果



*②現地住民に使用している SNS についてのアンケート調査結果



*③シンガポールと日本の比較

国	シンガポール	日本
国土	東京 23 区ほど国土 都市的	山や川が多く都市的環境だけではない
政治方針	政治批判は捕まる →法整備がしやすい アジアのハブ都市にする 思い立ったらすぐに行動する 国民性	政治的な批判が自由 →法整備がしにくい ゆっくりと慎重にものごとを判断してから行動する国民性